

① 雪女郎の正体

〔高田日報 大正14年2月11日〕

「雪女郎」の怪異なローマンスは雪に埋もれた越路に於ける伝説の唯一の資料として古くから伝へられ来たものであるが聖代の今日に於ても尚雪深い寒村ではその実在を堅く信じてゐる古老達の多いのには微笑を禁じ得ない。一体「雪女郎」と言ひ「雪女」と言ふ怪異の正体は何であらうと古老達の蒙を啓くために丁度「雪女」の出現しさうな或る吹雪後の夜泉高田測候所長を訪ふて通俗的にその依つて起る現象を聞く。甕を打つ寂しい霰の音に耳を傾け乍ら氏はしんみりと次のやうに語つてくれた。

「空に星さへもなくいちめん烏羽玉の闇に塗りつぶされた冬の夜の果てしもなく雪野を、肌をさすやうな寒風にともしれば明滅しがちな電灯の赤い光を頼りにトボくと夜の雪路を行くと、行く手におこそ頭巾を冠つた女がやはり自分と同じやうに寒さうな格好をし乍ら行く。ハツと思ふと全身の毛穴が一度に開いてゾーツと肌に粟を生ずる。「雪女郎？」と思ふと恐ろしさと好奇心とがこんがらかつて無我夢中で歩く。その夜からドツと発熱した一などと言ふ怪奇的な説は筆や口に依つて今も尚伝へられてゐるが「化け物の正体見たり枯尾花」でこれを学理的に探究すると実に下らない事である」と雪女郎の正体に就て話を進める。

「雪女郎の事を学名では(ブロッケン妖怪)とか或は(アントヘリア妖怪)とも言ふ。この語源は独逸のブロッケン山でその正体が始めて発見されたところから生じたものであると言ふが、これは光線の反射作用と回折作用のために起る現象で、決して実在的なものでない。雪女郎に喰ひつかれたなんて話は全くないからね……もう少し具体的に話しすると雪の夜路を提灯つけて歩く雪

の上から発散する水蒸気と空気の中に包含してゐる水蒸気が提灯から発する光線に反射回折して自分自身の姿態を遠方に拡大して現すのであつて、昔し雪の夜道を歩くときは何れも頭巾や頬冠り等の服装なので遠方に現れる雪女郎が必ず頭巾を冠つてゐるのもこのためである。これは陸上であるが、この現象が海上で現れた時は海坊主となる。乃ち朝まだきカンテラの光りで漁師が沖に舟を漕ぎ出すと舳先に忽然と大入道が現れる、理論は前述のと同じである」云々と。雪女郎の正体は枯尾花のそれよりも果敢ないものである。

② 狐から貰つたお札の二十円札

木の葉ではなくて本物

〔高田新聞 大正14年6月6日〕

桃色の燈を灯した狐の行列を見たとき云ふ人も、狐にだまされたとき云ふ人の話も此頃絶えて聞かなくなったが、そうした事実が今も尚ある。

それは櫻の花の淋しく散る頃の或る夜の……夜更けてから中頸諏訪村の某(名を秘す)産婆の雨戸を叩く者があつた。その産婆さんはその音に目をさまして雨戸をくぐつて見た。そこには堀川(仮名)と書いた紋の付いた提灯を持った男が三人たつてゐた。堀川は同村の大地主である。「誠に夜更けて申訳ありませんが奥様がお産で苦しんでゐられますから直来て頂きたいのですが」とその中の一人の男が云つた。「少々お待ち下さい」そう云つて産婆は身支度の為めに奥へ入つた。三人の男は戸外で何事かを囁き合つてゐたが、暫くして出て来た産婆は三人の男に伴はれて堀川の家へ急いだ。道には大きな石が散ばつてゐる上に暗夜であつたから時々産婆はよろめいた。

「済みませんが提灯を一つ貸して下さい」こうした産婆

の言葉に男の一人が頷いたやうな表情を示して「暗う御座いますね、私が足元を照らして下さいませう」と手を差延べた。「では私の前になつて下さい……」背後から足元を照らされるので多少気持ちが悪いので幾度か前になることを進めた。けれど男は前にはならなかつた。やがて堀川の家に着いた。苦しうな奥様のうめき声が聞えるので早速仕事にかゝつて三人の子を取上げた。暫くして又三人の男に送られて夜道を家に急いだ。そして自分の家の前の電柱の灯が見える所まで来ると「もうこの辺で結構ですわ。お宅様でも手不足なんですから」「そうですか。では此処で失礼致します。これは本当に志しただと云つて渡してくれと申されました。そして明日から来て頂かなくて結構だと申されました」と云つて男は紙包みを渡して帰つていった。産婆は家に着くとすぐ紙包みを開いて見た。二十円紙幣が一枚入つてゐたので産婆は「まあ、こんなに沢山、明日早速お返しやう」と思つたが忙しいまゝに翌日は堀川へも行かずに暮れていった。

三日後に見舞かたがた産婆は堀川の門をくぐつた。不思議にも三日前にあれ程難産で苦しんでゐた奥さんが余念なく庭の草取をやつてゐる。「あら奥さん」と産婆はあまりの驚きに言葉を続け得なかつたが、暫くして詳細を伺つて見ると奥さんは全然そんな事を知らなかつた。堀川家には三ツ子どころか一人の子供も生まれてゐなかつた。産婆はそれこそ狐につまづれた気持ちでひそかにがま口を開いて見たが話にある木葉の紙幣ではなかつた。不思議なこととその紙幣のところ……土色の毛が附着してゐた。若や人違ひとも思つたが同村は勿論、隣村にも三ツ子は生れてゐなかつた。

産婆がだまされたと云ふ其の夜、隣村美守村の沖柳で旅人が二十円だけすられたと云ふ噂が立つた。今でもやっぱり狐にだまされる人があるかと噂が高い。

③ 白狐の怪 騎兵稲荷に絡はる奇譚

〔高田新聞 昭和4年6月10日〕

高田騎兵連隊跡にある稲荷堂は今回高田市会協議会で新道村鴨島へ移すことになった。然るに此事をきいた榊神社々務所の片岡氏は稲荷社にまつはる奇しき譚を□して市の当局に一考を煩はして来た。ソレはこんな譯である。

騎兵隊の稲荷社は高田で最も古い歴史を持つてゐるので高田開府以前今の新道村鴨島の人々がお城の敷地にすんでゐた当時の鎮守神である。その後、高田築城と同時に鴨島は移転を命ぜられたけれど稲荷社はお城七十町歩の守護神として祀られ、即ち鴨島稲荷より大手稲荷と改名されたのである。

廃藩以後は社殿の荒廢に委せられてあつたけれど年々の祭事は旧高城の一部の人々によって行はれてあつた。師団は愈々高田に設けられ稲荷社の處は騎兵隊の敷地にあてられ御堂は放りだされた。

茲に不思議は当時の連隊長中山中佐へ夜な〜白狐が訪れ御堂の建立を訴へ、同時に屢々連隊に不祥事が起つたので中山連隊長これに恐れをなし、愈々騎兵隊稲荷として懇ろに祀られたのである。

師団は廃止といふので稲荷社は又荒廢に歸することになった。此時も毎夜連隊の宿直室に白狐が現れて祀りの始末を訴へたので、結局連隊解散の際に将校団と御用商人団が醸金して榊社に祭事を託したのである。

此奇しき譚に川合市長もうごかされたやうである。稲荷が果して鴨島に移さるゝか否や。

④ 坊ヶ池の伝説・坊太郎入水の記録

青柳の旧家で古文書発見

〔上越新聞 昭和17年9月4日〕

県道高田青柳線乗合自動車で約一時間、自動車終点より歩行で五十分、楡池村青柳地内の海拔四百三十メートルの山頂に水面々積十五町歩、年中瑠璃の如き碧青の水を満々と貯へる古池がある。この池は、楡池、高士、菅原、三郷各村の灌漑の水源池坊ヶ池である。この池に因なる哀憫な伝説は、古来古老の間に口伝へられて来たが、何れも何の確証もなく□々たるものでしたが、今回青柳の旧家阿倍牛太郎氏（阿倍家は陸奥の豪族安倍頼時が衣川館にて源義家に滅ぼされ其の子貞任、宗任が逃げて厨川柵に於て再び兵を興したが利あらず貞任は戦死、宗任は捕虜となつた。その一族に宗時といふ人があり主従僅かにて命からがら落ちのびて越後の山中で隠棲してゐた。これが阿倍家の先祖であると伝へられてゐる）の古文書整理中、図らずも坊ヶ池の蛇体と言はれる坊太郎入水の記録を発見したので、俄然郷土研究家間の話題の種となつてゐる。即ち同記録によると大体次の如きことが記されてある。

古昔、青柳村阿倍某の婦一夕夢に龍神来るを見て懐妊し、月満ちて玉の如き男児を生めり。その名を坊太郎といふ。幼より剛く又敏にして長ずると共に弥々水に親しむ。終日池に遊ぶこと稀にあらざ、時折龍神の招きにより龍宮に行きたしと母に請へ共、母の愛によりもとより之を許されず。或日坊太郎は例の如く釣竿を担ぎて池に赴きたるまゝ夕方に至るも帰らず、父母は村人と共に池の周りを名を呼びつゝ探し索めしも声のみ空しく響きて坊太郎を得ず、夜更けて足も重く家に帰れり。数日を過ぎて坊太郎は茫然として家に帰れり。



初秋の坊ヶ池

迎へ喜ぶ両親に言問ひもせず、只「疲れた眠い」と云ひ「我が睡眠の間、絶対に寢所を覗いてはいけない」と言ひて一問に入れり。父母は眼覚の遅きと覗く勿れといふ怪しさに、忍びてその寢室を窺へば寢所一面に水満々と湛へ、その中に小さき龍身を巻きて眠り居れり。あまりの驚きに思はず泣きくづれし父母の前に、眼覚めたる坊太郎は雲を呼び起して池に去れり。坊ヶ池の名も之に因るものである。

⑤ 白蛇教化の鐘 願清寺で供出供養

上越の梵鐘中最古の歴史

〔上越新聞 昭和17年9月13日〕

「白蛇教化の鐘」で有名な中頸和田村今泉赤門御坊願清寺では、十二日午前十時より梵鐘並に仏具供出供養法要を執行した。定刻、永年信徒に親しまれた梵鐘に別離を惜しむ善男善女が本堂に溢れた。先づ住職の梵鐘供出告示、供養法要あつて檀家総代、村長、国民学校長の送辞あり。二時聖壽萬歳を奉唱して解散したが、同寺の梵鐘は元禄三年、本願寺四代法主常如上人より内陣四本柱と共に許可されたもので、上越一市三郡梵鐘中でも最も古き歴史を有し、同寺の記録によると次のような伝説が伝へられてゐる。

元禄八年弥生の頃、同寺付近に大白蛇が住んでゐて時々出現しては作物並に人畜に被害を及ぼしたので、同寺七代住職津島玄夢師がこの住民の難儀を見るに忍びず、二十一日間、該梵鐘について読経、白蛇の教化につとめた結果、二十一日目に白蛇は死体を矢代川上に横たへて往生してゐたと言はれ、白蛇教化の鐘の名称もこれに因をなすものと言はれてゐる。

由緒の白蛇教化塔 和田村史に輯録決定

津島玄夢師の偉業を偲び

〔新潟日報 昭和17年11月4日〕

中頸和田村教育会では、同村今泉赤門御坊願清寺境内にある白蛇教化の塔を、今回村史に輯録すると共に、これが保存運動を起すことになったが、同塔については次の様なことが言伝へられてゐる。

元禄年間、和田村地内に白い大蛇が棲んでゐて時々

人里へ出現して作物並に人畜に被害を及ぼしたので、村民は戦々恐々として安んじて業につくことが出来なといふ状態だったので、当時願清寺三代住職であつた津島玄夢師はこの住民の難儀を見るに忍びず何とかして白蛇を教化しようと、それから二十一日間終日読経して白蛇教化に努めた結果、二十一日目の夜明け方、經文の功德の現れか白蛇は矢代川水面に巨体を横たへて往生してゐた。元禄八年弥生の頃であつた。同寺では、その死体を懇ろに埋葬して霊を慰める為、写真のやうな慰霊塔を建て毎年供養し來つてゐる。白蛇教化塔の名称も、これに因るものである。



白蛇教化の塔

⑥ 高田市の雁木の由来

怪猫退治に絡んだ伝説

〔高田新聞 昭和4年6月2日〕

高田の雁木と猫俣稻荷と牛木吉十郎と…無論之は伝説であるから牽強付会(道理にあわないこと)の點もあらう…。高田が越後中将(松平)の治下にあつた天和年間の昔(1680年代前半)、或る年金谷村の中ノ俣へ一疋の怪猫あらはれ人畜をあやめる事一方ならぬ。越後中将大いに心を悩まし家臣に命じて退治んとすれども、神出鬼没にして手も付けられない。此時中ノ俣の牛木吉十郎といふ力ずくれた強者、身を挺して怪猫に迫り青江下坂の銘刀を揮つて刺し殺し禍根を断つた。

その前年は恰も昭和二年の大雪に彷彿たる大積雪で「此下に高田あり」を其儘描き出した年であつた。越後中将は其怪猫を御覧になつて吉十郎の武勇をいたく激賞し、恩賞をとらするに依り何になりとも望めと吉十郎に下命があつた。此時吉十郎は恐懼しながら別に之と申上ぐるものもないが願はくば老ひたる後高田へ來ても、雪の爲に困難しないよう町家に雁木を造つて戴きたいと乞ふた。越後中将は直ちにそれを容れて普請方に命じて雁木を造らせた。これが高田の雁木の起源であつて此一事より想像するも其年は如何に大雪であつたかが窺はれよう。

牛木吉十郎の退治た怪猫は後の祟りを避くる爲、地を深く掘つて埋め、上に銀杏の樹を植え、傍に石祠を建て祀つた。それが今の南土橋にある猫俣稻荷(大町)である。そして畜猫が迷子になつた時、猫俣稻荷に願をかければ必ず出て來ると云ふので愛猫家の参詣者があるそうだ。牛木吉十郎家は代々資産を有し村内に重きをなして居たもので、現に其の家系は連綿として伝はり相当の資産もあ



土橋稲荷神社 (猫俣稲荷)

り村の有力者にかぞへられてゐる。即ち本社主催青年議会の代議士に選出された牛木吉十郎氏は其の後胤である。また牛木家は多くの大力をうんでゐる。殊に怪猫を退治した吉十郎さんは三十人力と称された。或る時友人等は吉十郎さんに何んぼ大力でも米十俵は背負はれまいと、からかった所が吉十郎さんは「何に十俵位は何でもないさ」と五斗俵十俵を梯子に縛り付け背負ったので友人等は肝っ玉を潰したそうだ。

怪猫退治に使った銘刀青江下坂の一口は先代が嘗て巡国の際、金澤の城下で買って来たもので、それが稀代の怪猫退治に役たつたので、現に伝家の宝刀として秘蔵されてゐるそうである。

上越に伝はる昔話の内でも最も傑出したものは仙台公に吊し切にされた杉野澤の生んだ義娼高尾と、牛木吉十郎の猫俣退治である。そして此二つの譚は幾千代の後迄も人口に膾炙されるであらう。

⑦ 櫛池地方の郷土史

二、坊ヶ池の名称と由来其他

〔高田日報 昭和8年1月28日〕

(前略) 此池亦青柳池、串池、杳太池とも云ふ。周囲廿町、水面約四万余坪にして水深く真に清潔なる池なり。古代より池の排水を堰止め、其溜水を十二大字の田地を灌漑せり。：：頗る眺望に富みたる處なり。此池は古代より云ひ伝ふる種々なる奇談甚だ多く、今其一二を挙ぐるに、**此池は水面藍の如く水上に一塵なく真に清き池なり。若し此水中を侵す時は天雷をなし地風を起す大いに懼るべしと云ひ伝ふ。里人亦此池に龍神住み半眼の鮒産すと云ふ。：：此池は古来より石を投じ或は多人数にて大声を發し用水組合落水の時又活発の挙動をなすときは天候の変ずる事不思議なりと言ひ伝へり。**青柳の池を坊ヶ池とも云へるは、青柳に坊と云ふものありて当池に入水してより坊ヶ池と云ひ、又杳太ヶ池と云へるにつきては伝説は此の池の北は大道にして往還なり、松之山往来に安塚村と云ふあり、中古安塚の城主杳田主膳介と云ふあり、月次の市あり、青柳の池主美女と化し常に買物に出る、城主主膳守恋慕して深澤山に具足を脱いで遂に池に入水せるより名づけたりと云ふ。今に具足石として二間に四間半ばかりの、厚さ二尺、上は平の石にて松平上総介殿、此石を掘られしが、翌日又元の如くなりしとぞ。又池の傍の久ヶ岳の城主になりしより杳田池と名づくとの説もあり。此の具足石を十三師団忠魂碑の台石に見に來られた事あり。(後略)

⑧ 【連載】 伝説の頸城

十六 木流しの地蔵

〔高田日報 大正6年10月16日〕

それはいつの頃だったか、今の直江津砂山の泉蔵院が火事の為に一たまりもなく焼きつくされてしまった事があつた。丁度恐ろしい烈風の吹き荒んだ夜で火の手は見る見の高まつて、その炎は海水を紅く染め火の粉は天をこがした。そして近所の漁師百姓が皆一大事とかけつけて来てその辺一帯は非常な混乱を呈した。ところがその混雑にまぎれて泉蔵院の本尊は小さな子僧に化けて人知れずそこを逃れ出ていづこともなく旅路へ上った。菅笠をかむり黒い僧衣に身を固めた、色の黒い背の低い其子僧の姿は旅から旅へ漂流して、今日は北国のはてで見受けられたと思ふと、明日は南国の並木路に見られた。さうしたさすらひの旅の数年間に於て子僧は家々の前に立つて経を讀んでは錢を乞ひ歩いた。彼は一刻も泉蔵院の再建を忘れられなかつたものと見える。菅笠を傾けて遠く故国越後の直江津とおぼす方の空を眺めて、嘆息をつくことも屢々であつたと云ふことだ。

或日彼は飄然として佐渡へ渡つた。そしてこゝで彼は専ら材木の蒐集に務めた。予定の量まで材木が集つた時、彼はそれを筏にして海へ流した。大波のうねりの中をその筏は穏やかな湖水を行く様にしづかにしづかに直江津に向つて進んだ。白い大きな筏の上にしよんぼりと立った彼の姿は肉眼では見えない程小さい点の様であつた。しかもその渺たる彼の身体には無限の輝きがあつた。そしてそれが直江津へつくと浜は又大騒ぎで早速之を以て建築を始め、あはただしげなどよめきに数十日間といふものは砂山は非常な賑はひを呈した。而もその建築中に於ける子僧の監督は仲々想像の及ばない程緻密に渡つたと云ふ事である。それが為に落成も意外にはかどつた。

かうした伝説をもった今の泉蔵院の御利益は非常なもので、今に木流しの地藏と称せられ信徒は日々に増してゆくばかりだといふ話である。

十九 瀉の鬼火

〔高田日報 大正6年10月24日〕

頸城平野の一隅に四か村に跨つてゐる一大耕地がある。：見渡す限り広漠とした稲田の打続く間を蜿蜒と銀蛇のやうに瀉川が西へ流れて行く。

小雨そぼ降る夜、ふつと何處から一つの火の玉が現れて、ふうはり／＼と瀉の上を彷徨ひ飛ぶことがある。この附近の人たちはこれを鬼火又は亡魂といつて、今では別に珍しいとも怪しいとも思つてゐないらしい。私は数年この地の近くに住んで居るので、是非一度其所謂鬼火を實現したいと思つてゐたが、未だに一度もその機会を得ないのである。お寺の坊さんに聞いたら「それは真実ですな、時には私どもの家近くまで来ることがあります。然し大抵の時は遠ひのか近ひのかよく解りません」と言ふてゐられた。

何時の頃か年代も姓名も解らぬが、昔この耕地の稲が毎年何者にか盗み荒された。種々と詮議の結果、遂に一人の貧しい男の所為と判明した。憤怒に駆られた衆議がこの罪人を生理にすると決した時、彼は甚麼にその残酷な罰の前に恐れ怨み悲しんだことであらう。

哀願も慟哭も一切顧みられなかつた。親兄弟妻子の泣き狂ふ前で彼は引出され、到頭手取取情容赦もなく穴に突入れられ荒土を被せて上から太い杭を打ち込まれて了つた。この永遠に尽きない彼の男の怨が遂に亡魂となつて最初は盂蘭盆毎に音頭のやうな悲しげな音響となつて現れたが、何時の頃かこの鬼火となつて時折彷徨ひ出るやうになつたのだといふ。

一説に或る恋に破れた村の男が瀉へ馬草刈りに出て丁度女も来てゐるのを見付け、研ぎ澄ました鎌で女の首を一撃ちに打落し、自分もその場で喉吭を切つて死んで了つた。その亡魂だといふ。然し私は何故かこの説を執りたくないのである。

二六 三太左衛門の大蛇退治

〔高田日報 大正6年11月9日〕

桑取谷に怪物退治を以て名高い話が二つある、一は吉十郎の猫俣退治で（此話は普く人の知る所）、一は三太左衛門の大蛇退治である。

三太左衛門姓は齋京、家代々春日山城上杉謙信公に仕へ郷内の大肝煎役を勤めてゐた。始め林氏と称したが、謙信公の上洛に随ひ京都街に上にて賽目を拾ひ吉兆として公に献じた。公喜んで賽と京とに因み姓齋京を賜つた。三太左衛門人と為り膽勇にして容貌魁偉口力衆に勝れ、針金の如き鬚と胸毛とを有してゐた。又酒を好み大盃を含みて痛飲し、偶々蛇の匍へるあれば捕へて佳肴として食つた。こんな風で人彼を呼んで荒武者といつてゐた。

当時郷内仲俣川の辺に大蛇住み耕地に現れ人を驚かすこと頻りであつた。村人恐れて遠く出耕を忌み、相次いで訴へて来た。三太左衛門村人の難を除かんと欲し、一夜月の出づるを伺ひ網打に赴くと称し、单身日頃の扮装に漁網を肩に短刀を腰にして徒行して家を出た。背丈に余る草藪を押し分けて進み、やがて谷底に大巖の覆うてゐる淵壺にと到つた。左右を顧視すれば大蛇の水を飲む通路らしく一面草の伏せるを見た。かくて三太左衛門は其巖上に盤坐して大蛇の出づるを待つたが、更けゆく夜に睡気頻に催して堪へがたくなり、つひに臂を曲げて一睡を試みた。暫くして鶏鳴頻に暁を報じた。三太左衛門まぼろに醒め「此の谷間に鶏鳴の達するは不思議」と立ち

上らうとしたが身は既に巖上に在らず狭き岩窟の中にも縮められてゐるやうな心地がした。しかも身は大地もろとも徐行するを覚えた。三太左衛門惟へらく「是はしまつた、彼奴にやられた」と即ち蛇腹に捲かれながら腰の短刀を抜き拳も通れと膝下に刺した刀は正に蛇の腹壁を貫きて土中に達した。蛇の狂ひ走るにつれ腹壁はさけ、三太左衛門の身は地上に匍ひ出ることが出来た。そこで立ち直り刀を振り大蛇を切り背骨を採つて家に帰つた。そして□の鶏鳴は短刀に鏤めし名作純金鶏の金具の鳴けるものであつたことが後でわかつた。今に其刀及び其蛇骨が其家の宝物となつて居るさうである。又此地のある者等は三太左衛門の武勇を賞し其像を描き門戸に貼り魔除けにして居るさうである。

三三 狐の抜け山

〔高田日報 大正6年11月17日〕

奇談『葛の葉』に似た伝説がある。所は中西両郡の境で名立町の附近「狐の抜け山」。時は加州前田利長侯の治世下で現在の停車場界隈が町の中心であつたと云ふ。：小林某と称した独身者があつた。平素名主の小間用を足す身で頗る律気者であつた。

一日薪拾ひに山へ出掛け夕暮れまでセッセと働いて居ると、何處からともなく一人の窈窕たる美人が現れて時偶と息を漏らしながら其男に對した。「オヤマア一人でよくお稼ぎなのね。唐突に茲んな事をお耳に入れるも異なものです、妾は親兄妹もないほんの野中の一本杉なのよ、で何處と頼る辺なく行先ない悲しい哀れな身の上、一層死んで終ふと此處まで来ましたが、別に茲と死場所もなく困つて居ます。何うぞあなたのお手で一思に殺つて下さいませ」との意外の話。小林某はさてさて世には同じ

やうな身の方もあるもの「実は私もあなたのような一本者、ですが未だそれ程死ぬ気にもなれずこうやって居ります」と云ふをキツカケに相互の身の上話が開陳された。遠くても近いは男女の仲、まして身は同じ運命の神の手にある二人はそれから一入同情しつされつ、とうとう手鍋さげて一緒に暮らすことになった。そして二年目にはもう玉のやうな男児を挙げた。

所が其後の或る日、小林某が外出先から帰って来た、何時も門口に迎へる妻が居らぬので不審りつゝ一室を窺いた所がコハ如何に最愛の妻は真の人間でない、見るも怖しい老孤であった。斯くと知った妻はもはや正体の露はしたる以上は此世に居られませぬが、せめては此子を育て上げて下さりませと一ケの玉を置いて遙か山の方へ消え去った。子供が飢えぬと云ふ玉は重宝極まる名玉だった。之を知った剛欲な名主は三遍までも其名玉を密に盗み取った。小林某から之を聞いた妻の老孤は終に憤然として山崩れを起し名主の家を地下に葬つて終った。それは恰も加州侯江戸表参勤交代の帰途の砌であった。

⑨ 創刊したばかりの『高田新聞』から 大蛇呑兎

〔高田新聞 明治16年9月9日〕

当郡平丸村○○○○は元と左官職なりしも当時一般の不景気より好き銭取りもなき儘に近頃にては本職業を廃し炭焼翁と変し近辺の深山に行き炭焼して其日を送りしが二三日前常の如く炭を焼き居りし処微風だもなきに不意に木葉の鳴出しに○○○○は驚きながら仰ぎ視ればコハソモ如何に三丈(約9m強)にあまる大蛇が一疋の兎を半分程も呑み居るに再び仰天し膽も消失せる心地して狼狽逃げんとせしを大蛇は尾をもて○○○○を痛く撲しに○○○○も此ぞと思ひば一生懸命持ちたる鉈

にて所嫌はず滅多打に切付跡をも目返らず疾足に我家へ逃帰りしに入るや入らずに転び込気をも失ひ正体もなければ家内者は打驚き霍乱が虎列刺病かと醫者や薬と大騒ぎし後にて漸々○○○○は正気に返り刃り見廻し物さへ言さるに家内の者は不審を抱き其委細を問ふに漸々右の次第を委しく語りしに一同又一層の驚を増し其中にも無事で帰りしを喜び其言を村の若者に語りしかば血気に隼る若者共八九名申合せ各斧や鎌と得物を携ひ○○○○の話せし場所へ至りて見れば兎は已に呑れけん影だも見へず独大蛇の眼を怒らせ此方を睨居るに今迄で勢強き若者も皆々色を失ひ我先にと逃帰り右の有様を話せしとなん又○○○○は其后床に着き余程病も重く命も旦夕に迫りし様子なりと報知のまゝ

大蛇

〔高田新聞 明治16年9月28日〕

当郡榆島村○○は此頃隣家より我家へ帰らんとする途中向ふの藪より丈は八尺(約2.5m)許なれど最と恐ろしき手足あり耳もある大蛇が口を開き赤き舌を出し○目掛けて来るに○○は覚へず二足三足逡巡せしが這は未熟なり残念と我と我気を励して右手に持たる木刀にて滅多打ちに叩き付け遂には其蛇を殺せしが回りは一尺位鱗目共一寸二三分位もありしといふ